学 会 記 録

学 会 記 事

1. 第8回年次大会概要

昭和44年度第8回全国大会は10月14日より16日に亘り，大阪商工会議所を中心に開催された。この大会の開催に関しては，関西部会の各会員の方々をはじめ，大阪市港湾局，大阪府，地元大学関係および港湾関係団体各位のご努力により，大変充実した大会であった。研究報告ならびにシンポジューム等を通じて，学会の質的向上もうかがわれ，各会を通じての出席者は約80名をこえており，共通論題，自由論題においての報告と討論も活潑であった。大会プログラムおよび，研究報告プログラムを示すと次のようである。

(1) 大会プログラム

月 日	時 間	行 事 内 容	会 場
10／14 （火）	10. 30 11. 00 12. 00 ～ 15. 00 16. 00 ～ 18. 00 ～ 20. 00	開会（受付） 見学会(大会会場大阪商工会議所集合) 大阪湾見学（大阪港中央突堤乗船） （昼 食） 大阪港～堺・泉北港～会場 講演会・映画会 理事役員会	大阪商工会議所 1号会議室 国際ホテル
10／15 （水）	9. 00 ～ 16. 00 16. 00 ～ 17. 00 18. 00 ～ 20. 00	研究報告会（共通論題） （記念撮影）（昼食前） （シンポジューム） 総 会 懇親会	大阪商工会議所 401 号会議室 同 上 大阪商工会議所 ニューコクサイ
10／16 （木）	9. 00 ～ 16. 00	研究報告会（自由論題） （昼食会） 閉 会	大阪商工会議所 401 号会議室

(2) **研究報告会プログラム**

① **研究報告（共通論題）**　報告時間１人40分質疑応答はシンポジュームにて行いますので配布される用紙に御質問御意見を記入の上提出願います

10月15日（水）9.00～13.00　（大都市港湾の諸問題と将来）

(1) 大阪港の諸問題と将来……（大阪市立大）柴田　悦子

(2) 大都市港湾としての東京港の問題……（運輸省港湾局）今野　修平

(3) 広域港湾とターミナルオペレーター……（原田港湾作業㈱）喜多村昌次郎

(4) 広域港湾論

（主としてオペレーションの観点から）……（港湾経済研）高見　玄一郎

(5) 大都市港湾の問題点と将来……（関東学院大）北見　俊郎

―― 昼食（インターミッション・１時間）――

シンポジューム　10月15日（水）P.M 2.00～4.00

シンポジュームの方法

(1) 共通論題報告者出席の上，あらかじめ提出された質問および意見に対して応答を行う

(2) さらに，二度目の質問および意見に対して応答を行う

(3) 以上を基にして，討論を行う

② **研究報告（自由論題）**　報告時間１人40分　質疑応答10分

10月16日（木）A.M 9.00～P.M 4.00

(1) 今後の経済成長と港湾問題……（三光汽船）岡庭　博

(2) 港湾における情報の研究……（関東学院大）荒木　智種

(3) 港湾労働者の供給側面について……（海上労研）篠原　陽一

―― 昼食（インターミッション・約１時間）――

(4) 港湾労働力の雇用構造と雇用管理……（海上労研）玉井　克輔

(5) 港湾運送料金と近代化料金について……（日本港運協）山本　長英

(6) 港湾における倉庫荷役の問題

（とくに沿岸荷役との関連について）……（横浜新港倉庫）桜　井　　正

(3) 大会シンポジウムの大要（文中敬称略）

（10月15日，14.00～16.00）

テーマは，本大会の共通論題「大都市港湾の諸問題と将来」について実施した。

はじめに，柴田銀次郎（関西大学）が，このテーマの意義と本学会こそ大所から取組んで，実態分析を通して本質を究明し，重要課題に応え，今後の指針を見出すことの任務がある，とあいさつ。つづいて，柾　幸雄（横浜市立大学）の司会で，前掲5名（柴田悦子・今野・喜多村・高見・北見）の共通論題報告者の追加的補論がおこなわれた。ついで，質疑応答を主にした討議にはいった。

まず，柴田に対しては，東　寿（石川島播磨重工）から「背域の物流を握むためには輸送経路の調査を」金井万造（京大土木大学院）から「輸送体系上の港湾配置上の問題」「大都市港湾との関連における地域産業と土地利用」。今野に対して，金井から「水際線と水面の有効利用のための施策と整備について」，永野為紀（仙台大学）から「広域港湾の意味と大都市港湾との関連について」。喜多村に対して，千須和富士夫（港湾経済研究所）から「港運業の変革にともなう労資関係のあり方について」，東から「ターミナルオペレーターの概念について」。高見に対して，東から「コンテナ埠頭問題，とくに外国系船主をめぐる法的・政治的課題」「埠頭ターミナルの投資主体と公共規制などについて」，長野正孝（京浜外貿埠頭公団）から「広域港湾としての情報処理システムについて」。北見に対して，千須和から「港湾の近代化論の概念と発想思考過程のあり方」，亀岡博文（大阪市港湾局）から「港湾自体の本質と価値判断」そして「港湾の近代化・合理化のなかで残る古い形態について」。5名に対して，藤尾豊一（神明倉庫）から「港運業・倉庫業に対する集約化・協業化政策の疑問点について」。以上の諸氏の質問および意見に対して各報告者から，年報第7号に所収の論説に示されている視角にもとづいて，それぞれかなり詳しい解答と意向が述べられた。

港湾それ自体が極めて広範な内容を有し，多方面の外的諸事象とかかわりあいをもつうえに大都市問題との関連において考察していかねばならないので，「大都市港湾

の諸問題とは何であるのか」を理解することからはじめなければならない。そして，そこで多元的見解が羅列されようとも，共通の理念的広場に立って，討議しない限り「将来どうなるのか」，さらに，「そのために関係者は，もしくは学会としては何をしたらよいのか」という段階にのぼることはできない。しかし，本学会の現状では残念ながら，まだ当面の個々の現象や狭義の行政・経営そのものに対処することのみを重視しがちな会員が少なくないので，折角の討議発展のための導入的質問が出されても，深化させにくいし，また都市なり経済政策なりの概念や思考様式についての理解の度合には会員間に想像以上の差違がありそうである。大都市港湾の問題として，議論を昇華させていくべきはずのものが，逆に個別的物件に離散しかねない。しかし，大都市港湾がとにかく大問題をはらみ，今後ますます多くの重要課題をかかえながら，われわれの視野一杯にひろがってくること，港湾という特殊部落もしくは桃源境の中で，仲間意識だけであるいは安閑としてはいられなくなったこと，だけは強烈に確認されたはずである。幸いにして70年度清水大会では埠頭経営が，71年度横浜大会では広域港湾が共通論題の案として候補に上っている。一体われわれ港湾人は，日本の港湾をどこへもっていこうとするのか，それは何のために，誰のためにそうするのか，港湾研究の原点を今はどこにおくのがよいのか，学会であるからには各人がも少しこれらのことを意識したうえで，多数の発言を期待したいものである。質問者と報告者との間の単線型討議でなく，一般参会者間での白熱した討議を今後に望みたいし，大都市港湾のテーマでの重要な柱ともなった二つの問題が，70，71年のテーマにおけるシンポジウムで継承発展されることを願っている。なお討議時間が少な過ぎることと質問者に対する報告者の応答が概して長くなりがちであることが年をおうにつれて痛感されるのは少数者ではあるまい。もちろん司会者の拙劣であることを恥じ衷心より深謝する次第。（文責　柾　幸雄）

(4) その他のスケジュール

見学会（大阪市港湾局の「御崎丸」により大阪港，泉北港，堺港，堺港臨海開発センター等見学）

講演会（大阪市港湾局長叶清氏による「大阪港の現状と問題点」）

映画会（大阪港およびコンテナ関係フイルムの上映）

懇親会（「ニューコクサイ」において，大阪府，大阪市ならびに現地港湾関係者各位出席のもとに行なわれた。

総　会（下記各項にわたっての報告事項および協議事項の承認がみられた。）

① 報告事項

ⓐ 昭和43年度北海道大会完了にともなう諸報告　ⓑ 事業促進に関する報告（年報編集委員会の再編成・来年度編集方針，その他名簿作製，資料配布，部会活動状況，昭和43年度大会準備状況，その他）　ⓒ 役員改選状況　ⓓ 会員増減の件　ⓔ 会計事務の件

② 協議事項

ⓐ 昭和44年度会計（予算，決算）承認　ⓑ 新入会員の承認　ⓒ 来年度大会開催地（清水港）承認　ⓓ その他（年報，No.8より成山堂刊行の件，第10回大会時の記念出版の件等）

2.　常任理事会開催状況

昨年度大会後本年8月までに下記のように常任理事会が開催された。

(1) 昭和45年2月7日，日本港湾協会において，主として関東側の常任理事，その他役員等により下記のような「打合せ会」がもたれた。なおこの打合せ会は，4月11日予定の常任理事会の前提として開かれ，あらかじめ他の常任理事の承諾をうると共に，この結果を報告した。

（出席者）　矢野剛，東寿，伊坂市助，高見玄一郎，北見俊郎，柾幸雄，喜多村昌次郎，荒木智種，今野修平

（注）　上記出席者中，喜多村，柾の両氏は会則10条により出席，北見，柾，今野，荒木の諸氏は事務局側として出席。

（打合せ項目）

① 学会年報編集にかんして（成山堂刊行にともなう方針）

② 大会準備，年報発行スケジュールについて

③ 学会発足10周年記念事業にかんして

④ 来年度大会（清水港）の共通論題にかんして

（大体「ターミナル・オペレーター」をめぐる諸問題について，あるいは

「ターミナル・オペレーターの論理と課題」等といった方向の共通論題が良しとされた。

⑤ 来年度大会予定地にかんして（大体京浜地域を予定する）。

⑥ 会計事情について（柾会計幹事から大略の説明があった）。

⑦ 新入会員にかんして（賛助会員4社，正会員3名，退会者届1名）。

⑧ 事務局および事務局長にかんして。

（北見事務局長が事務局当番校である関東学院大学の専任を辞任することにともない，事務局長辞退の申し出があり，このため後任事務局長及び当番校のことについて種々話し合いがもたれたが，改めてこの問題を4月予定の常任理事会にてとりあげるものとした。）

(2) 昭和45年4月11日，日本港湾協会において下記のように常任理事会が開催された。その大要は次のようである。

（出席者）矢野剛，柴田銀次郎，白山源三郎，東寿，伊坂市助，紅村文雄，高見玄一郎，北見俊郎，喜多村昌次郎，柾幸雄，今野修平，荒木智種

（注）上記出席者中，喜多村，柾の両氏は会則10条により出席，北見，柾，今野，荒木の諸氏は事務局側として出席。

（報 告 事 項）

(1) 関東側常任理事会打合せの件（前回打合せ会事情とその内容について）。

(2) 大会（第8回）完了の件（大阪大会完了諸般の事情について）。

(3) 部会活動の件（北海道，関東，関西部会状況報告，後名古屋港を中心とする部会成立促進にかんする要望がみられた）。

(4) 事業促進の件（年報編集委員会報告，今野氏編集委員加入，その他）。

(5) 44年度会計報告の件。

（協 議 事 項）

(1) 45年度予算案の件（昭和44年度会計報告の承認と共に予算案が承認された）。

(2) 大会（第9回）の件（清水港大会の共通論題名の変更「流通革新と埠頭経営」その他）。

(3) 年報編集の件（編集委員会案，成山堂刊行，論説公募，その他）。

(4) 来年度大会の件（京浜地域を大会港と予定し，事務局にて具体化を図る）。

(5) 会員増減の件（新賛助会員，正会員の承認）。

(6) 学会創立記念事業に関する件（10周年記念のための単行本発行の件承認，特別編集委員会を事務局に編成して検討する）。

(7) その他（北見事務局長辞任の申出が否決され，今後共その任に当るものとし，尚事務局を下記に移転する）。

横浜市中区山下町279の1地先

（横浜市山下埠頭港湾厚生センター）

運輸港湾産業研究室内

3. 部会活動状況

北海道部会

一昨年の日本港湾経済学会第7回大会の北海道開催後，一息いれた恰好で，部会活動も静止状態であった。会員各位の要請ならびに新規部会加入希望者も多くなって来た状態のもとで，若干の停迷ムードを払拭し，従来よりさらに充実した活動を展開していくこととなった。最近の部会活動と今後の主な計画は次のとおりである。

(1) 部会報「北海道港湾経済」No. 7の発行。

懸案の第7回全国大会記念特集の部会報を8月5日発行した。主要内容は下記のようである。

巻頭言　木材バーヂの工夫　　桧山　千里

北海道港湾の現況と課題　　栗林　　隆

「如何にして小樽港の繁栄を実現するか」学会九氏の提案と，石狩港新港を含め進めるべき方向と課題　　神代　方雅

北方経済圏に関する理論的覚書　　武山　　弘

70年代の港まちづくり　　永瀬　栄治

日本港湾経済学会第7回大会総括討論，シンポジュームについて　　徳田　欣次

日本港湾経済学会第7回大会函館シンポジューム（青函トンネル開通の函館経済への影響）

（記　録）

① 問題提起報告

函館港の現況　奥平　忠志

青函トンネル建設の影響について　高間　勉

函館圏総合開発基本構想について　宇佐美茂彦

② コメント

大島藤太郎，岡庭博，喜多村昌次郎，今野修平，北見俊郎，柾幸雄，柴田悦子

③ 学会側挨拶　高見玄一郎

故森光夫部会幹事，故小松雄逸会員追悼の記。

書評，北見俊郎「港湾論」和泉雄三

文献紹介「北海道の港運業の社史」（その２）

「年史檜崎産業ＫＫ」　町田真也・伊藤昌勝

「小樽港運20年史」　徳田欣次

日本港湾経済学会第７回大会付帯行事記録

① 函館シンポジュームプロフイル

② 室蘭苫小牧見学の記

③ 小樽「第７回大会」プロフイル

④ 釧路港視察の記

⑤ 留萌・稚内港視察の記

部会記事

(2) 部会総会と研究会の開催

８月下旬札幌において開催，

研究会は次のとおり。

北海道総合開発第２期計画と港湾　町田　真也

交通体系におけるフェリーについて　神代　方雅

(3) 小研究会の開催

「北海道港湾の変遷」桧山千里他，小研究会を随次開催する。道外の日本港湾学会会員の来道の折などの機会をとらえて研究会をもつことも計画。（来道の本

部会員にはご負担をかけない程度の研究会の予定なのでご来道の折は，北海道部会事務局へお立寄りまたはご連絡をお願いいたしたい。）　（文責・徳田欣次）

関 東 部 会

昭和43年度にひきつづき，関東部会は研究発表と討論を中心に，活潑な活動を持続した。

以下昭和44年度における部会活動の要旨を記録より紹介して，報告にかえておきたい。

(1)　昭和44年度第１回関東部会

日時　　昭和44年９月６日（土）

場所　　日本港湾協会談話室

（東京都港区芝琴平町１）

発表者　○玉井克輔氏（海上労働科学研究所）

○篠原陽一氏（　　〃　　）

○山岡靖治氏（　　〃　　）

発表題目　「港湾労働の管理と意識問題」

参加会員　18名

発表要旨　調査の概要，調査内容および各編主要目次につき，当日配布された要旨を紹介して，かえておきたい。

調査の概要

昭和43年１月～11月の長期に亘り，横浜港，神戸港，東京港の店社14社よりのインタビュー調査および横浜港76社，神戸港98社のアンケート調査による詳細なデータを基礎にした解析研究である。

調査内容および各編主要目次

第１編　港湾荷役企業の労務管理

1　労務管理の組織化

Ⅱ　雇用構造と労務管理

Ⅲ　労働条件と福利厚生の管理

Ⅳ　港湾労働の機械化と労務管理

第2編　港湾労働者の職業定着意識

Ⅰ　港湾流入過程の実態

Ⅱ　港湾流入と定着意識の形成

Ⅲ　定着意識の現状とその内容

Ⅳ　港湾労働者の流出過程

第3編　港湾労働の時間的構造と労働負担

Ⅰ　総　括

Ⅱ　荷役運搬における時間分析

Ⅲ　荷役作業のエネルギー代謝率からみた労働強度

Ⅳ　定期船船内作業員の生活時間と労働負担

第4編　外貿公共埠頭における荷役機械化と労働力需要

1　総　括

Ⅱ　港運統計からみた荷役機械化と労働力

Ⅲ　貨物別荷役機械化の動向

Ⅳ　荷役オペレーションからみた機械化と労働力

(2)　昭和44年度第2回関東部会

日　時　　昭和44年12月6日（土）

場　所　　日本港湾協会談話室（東京都港区芝琴平町1）

発表者　　および発表題目

荒木智種氏（関東学院大学）

「港湾と情報」

関谷義男氏（東京港運協会）

「東京港における港運業の現況と問題点」

参加会員　23名

発表要旨

「港湾と情報」

氏の長年に亘る巾広い研究成果より，まず港湾の近代化のため，港湾に情報の広場を設けることに努力を傾けねばならないという問題意識から説き起されて，大略

次のような報告が行なわれた。

港湾産業のなかにかかえこんでいる多くの諸問題について，プレス・コミュニケーションが果す公共的（社会的）責任は大といわねばならない。

しかしながら，わが国には近代的コミュニケーションは港を場として，主に外国人の努力によって，長崎，横浜でスタートしながら（治外法権の後楯によって）明治新政府樹立後の中央集権体制（新聞条例等）により，封建的なコミュニケーション体系をその基盤に構築してしまった事実。これに反して欧米先進自由諸国が勝ち得た言論の自由は市民階級の下からの力であり，わが国には見られない〝高級紙〟といった公器が市民社会の内から生まれてきたといった事実をみるに，両者の出発点の相異が容易にうかがわれるであろう。

ここでは，特に，日本の近代的コミュニケーションの窓を開いた〝情報文化の地〟であった横浜を中心に「港と新聞」の関連性について（1860～1870）主要な英・邦字紙をとりあげそれらの内容，運営等について考察した。

一面，同じ敗戦国の西ドイツ，ハンブルク港の港湾誌紙とブレーメンその他の港湾関連紙の現状をもあわせて梗概した。

いまや，一貫協同輸送又は一貫複合協同輸送といった合理化政策を推進させ，かつ調整する一つの主要な公共的責務をもったプレス・コミュニケーションは「従来よりも幅の広い，かつ深い（部分的，表面的ではなく）連繋のとれたコミュニケーション（情報）の場を築くことに努力を傾けねばならない。」

「東京港における港運業の現況と問題点」

東京港の港湾運送業について，最も造詣の深い会員である氏から，東京港関係48社の調査結果による分析も随所に折り込みながら，港湾運送業の構造と性格，港湾運送業の労務管理についての見解を発表なされた。その結果東京港の港湾運送業は，元請――下請の系列的従属的支配構造を持つと同時に港湾利用の諸産業のヒエラルヒーの最下位に位置する。老舗ほど消極的な業者がある。港湾運送業の法人化は戦後になって進んだが，その内容は社会的資本に転換せず個人的資本に留っている。労務対策は資本の大きさにより異なり，中小資本金規模の対策は未熟である等々いくつかの注目すべき点を指摘なされた。

なお本部会終了後，有志により交通文化賞受賞の矢野剛会長を囲む会を催した。

(3) 昭和44年度第3回関東部会

日時　昭和45年2月7日（土）

場所　日本港湾協会談話室（東京都港区芝琴平町1）

発表者および発表題目

○小倉健男氏（京浜外貿埠頭公団）

「東京横浜両港における輸出入コンテナ貨物流動状況の調査結果について」

○高見玄一郎氏（港湾経済研究所）

「アメリカにおける港湾でのコンピューター利用について」

参加会員　26名

発表要旨

「東京横浜両港における輸出入コンテナ貨物流動状況の調査結果について」

京浜外貿埠頭公団が，氏を中心にして激増する東京横浜両港の外貿コンテナ貨物の流動状況を東京横浜両税関の協力を得て行なった調査結果を発表した。

その結果，東京横浜両港間にかなりの交錯輸送が認められること，特に東京港積出しコンテナのバン詰めは，横浜港で行なわれているケースがあること。地方からのコンテナは，全体的にみると少なく，貨物発生地は京浜であること。コンテナのバン詰めは，予想以上に港湾運送業で行なわれていること。調査時点での結果では清水港，一部は名古屋からの流入もあること。輸入コンテナは東京への指向性が高いこと等々新しいコンテナリゼーション下における物流の新事実を次々と紹介下さった。

なお公団および氏の御好意により，出席会員に高価な調査報告書が贈呈された。

「アメリカにおける港湾でのコンピューター利用について」

上記の題名ではあるものの，米国港湾の情報システム全般に亘る研究成果の発表であり，氏の長年に亘る専門的立場からの見解でもあった。特に今回の研究発表の中で，港湾における情報システムは，米国陸軍の輸送業務への応用に基因をなすとの新たな見解を発表なさり，米国陸軍輸送司令部でのシステムの

目的，組織から説き起され，ここからシアトル港のコンピューターシステムの解析を試みられた。その結果より，今後における港湾のコンピューターを中心とするシステム化への試案を出入貨物別に提示し，多くの議論を呼んだ。

（文責　今野修平）

関 西 部 会

44年度は大学紛争の影響で，部会活動まで手がまわらず，一回の部会研究会を開いたにすぎない。しかし第8回大会の地もととして，その準備のために，数回の理事・役員会・大会実行委員会などを開いた。

第一回関西部会（S.45.3.28）

場　所　　船舶クラブ

参加人員　15名

報告者

1. 港湾運送事業の現状　　神戸海運局　山田隆英氏
2. 港湾拡充政策について　　三光汽船・大阪産業大　岡庭　博氏

港湾運送業の集約が一段落したところで，その担当者である海運局から，集約の実態と今後の問題点について報告をうけた。当日種々の理由で，参加者が少く，とくにいつも出席される業界側の不参加が目立ったのは残念であった。報告は今後の問題として専用埠頭における港運業のあり方，集約の段階で最後まで残る機械化と労働問題等に関して報告のあと意見交換が行われた。

岡庭氏は，海運拡充政策の実現はまず港湾拡充政策からという観点で，港湾整備の具体的方向まで示された。例えば今後内陸港や河川を利用した港湾建設の可能性について論じられ，国家の資金援助は造船から港湾へ重点をかえるべきではないかという指摘がされた。

本部会にたまたま来阪されていだ伊坂市助先生が御出席になり，部会終了後伊坂先生を囲んで関東方面の部会活動の様子を聞き，学会運営に関して懇談を行った。

（文責・柴田悦子）

4. 中部々会発足のうごき

名古屋地区を中心とする部会発足は，名古屋大会（昭和40年度）以来の課題でもあった。その後，度々地元諸大学，名古屋港管理組合をはじめ関係団体等との打合せ，ならびに学会事務局との連絡を重ね，ようやく本年11月頃発足の予定となった。この間いろいろ困難な問題があったのにもかかわらず，この段階をむかえたことは地元関係者各位のたゆまぬ努力と熱意の結果と，よろこびにたえない。いま，その大要を記すと次の通りである。

会則骨子（案）

名称　本部会は日本港湾経済学会中部部会（仮称）という。（第1条）

目的　本部会は，日本港湾経済学会会則第19条による研究部会として中部地区の港湾に関する諸問題について調査研究を行ない，その合理的発展をはかるとともにあわせて港湾の近代化に寄与することを目的とする。（第2条）

事業　本部会の目的を達成するために次の事業を行う。

(1) 中部地区港湾を対象とした社会的・経済的諸問題の調査研究

(2) 研究会・講演会・講座の開催および本部会の目的達成に必要な事業

(3) その他日本経済学会の目的とする諸事業の推進

役員　本部会に次の役員を置く（第5条）

(1) 会　長　　1名

(2) 副会長　　1名

(3) 理　事　　若干名

(4) 監　事　　2名

会員　本部会の会員は日本港湾経済学会の正会員，賛助会員にして本部会の趣旨に賛同し入会を希望すると共に会長の承認をうけるものとする。（第11条）

以上は昭和45年8月18日の設立準備会での会則審議の際の資料によるものであって，案としての会則の特徴を示したものである。

（問題点）

部会設立に際して，とくに問題になった点をあげると次のようである。

(1) 学会々則，第18条（支部）第19条（部会）との関係上，「支部」設立にすべきか

「研究部会」にすべきかの論議が行なわれた。これは，従来の部会設置との関係上現実的に両者の性格をも兼ねており会則そのものの内容を検当する必要もあるように思われる。

(2) 部会々員の種類，資格，会費等の問題をめぐり，学会そのものと部会との関係，また部会員の経済的負担とその地域への還元性等についても論議をみた。この点も今後の学会ならびに部会の運営上注意すべき意味が含まれているように思われる。

(3) その他，すでにのべたように昭和45年11月頃を目途として，創立総会が開催される予定であるが，それまでに更に部会々則の整備をはじめ，その他の諸準備が進められる予定である。

中部々会設立準備会名簿（いろは順）

区分		氏名	所属	備考
正会員	大学関係	井関弘太郎	名古屋大学	
		加藤只一	中京大学	
		酒井正三郎	南山大学	
		勝呂弘	名古屋学院大学	
		田中文信	市邸学園短期大学	
		野村寅三郎	名古屋学院大学	
		橋本英三	名城大学	
		橋本博之	南山大学	
		松永嘉夫	名古屋市立大学	
	その他	紅村文雄	名古屋港管理組合	副管理者
		白石国彦	東陽倉庫KK	専務取締役
		富田俊三	名古屋商工会議所	事務局長
		前田一三	名古屋鉄鋼埠頭KK	社長
賛助会員		伊勢湾海運KK		社長　高島四郎雄
		東陽倉庫KK		常務取締役　富安正美
		藤木海運KK		社長　伊藤清

区　分	名　　氏	所　　属	備　　考
賛助会員	名港海運KK		社長　鳥居市松 コンテナ課兼企画課長 高橋治朗
	名古屋港管理組合		総務部長　小林陸郎
学会	北見俊郎	青山学院大学	学会事務局長
準備事務局	柘植安太郎	名古屋港管理組合	総務課長
	宇尾野俊夫	名古屋港管理組合	行政監察課長
	奥村孝允	名古屋港管理組合	総務課庶務係長

（文責・北見俊郎）

5. 会員増減（昨年大会以降受付のもので，昭和45年4月までの常任理事会において承認済のものを示す）

（賛助会員）	（正 会 員）
馬淵建設株式会社	大久保喜市
伊勢湾海運株式会社	清瀬啓之
株式会社三栄商会	菊地平明
昌栄運輸株式会社	竹田隆
社団法人　日本貨物検数協会	岩田吉英
宇徳運輸株式会社	市来清也
小川運輸株式会社	松尾達彦
東港丸楽海運株式会社	鈴木暁
朽木合同輸送株式会社	土居靖範
	松本好雄

6. 年報編集委員会状況

新たに今野修平氏を編集委員（事務局幹事）に加え，年報編集ならびに，学会創立10周年記念号の刊行につき，しばしば編集方針，刊行の具体策について委員会を開催

してきた。すでに常任理事会において承認済のように，年報に新たな論説を加え，サマリー（英文）を附すこと，その他，成山堂出版等についての打合せ，交渉を進めてきた。（但し，英文サマリーは都合によってNo.8は見送ることにした。）また，記念号については当初は従来の年報と別に約300頁，A5版，単行本にて刊行を計画したものの，財政的およびその他の事情で実現がむづかしそうなので，さらに検討中である。また，今後は，論文執筆要領を再確認すると共に，質的にも高い年報の刊行を念じているので，今後共会員諸兄の協力が与えられることを念じている。

7. その他

(1) 新事務局について

4月11日の常任理事会の協議の結果，5月11日に「運輸・港湾産業研究室」（室長喜多村昌次郎氏）内に移転した。なお，同室員，土居靖範氏（会員）に事務局員になって頂くと共に，同室員鈴木暁氏（会員）の協力をもお願いすることになった。この事務局は横浜港山下埠頭（厚生センター）の入口に立地し，移転に関しては，横浜市長飛鳥田一雄氏の快諾も得ると共に，横浜市港湾局長山添鉄一氏，同総務部長山本功氏のご厚意と，室長喜多村昌次郎氏からの多大なご協力をも得ている。

(2) 弔　意

長崎県立国際経済大学教授の新宮志良氏は，昭和45年2月に交通事故のためにお亡くなりになった。

ここにつつしんで哀悼の意を表すると共に，そのご冥福を祈り，かつご遺族のご平安を念ずる。

会員業績リスト

注 (1) このリストは昭和45年2月20日〆切にて，それ以前1か年における会員の研究業績をアンケートし，それをあいうえお順に収録したものである。

(2) したがって，それ以前の業績リストは「港湾経済研究」No.7（昭和44年）に収録されている。

(3) 会員中，海外出張その他の理由でアンケートの得られなかった会員についてはふくまれない。

(4) このリストは主として港湾関係のものにかぎられ，リスト中「区分」は，著書，共著，訳書，翻訳，論文，資料，書評，紹介等の別を示す。

会員業績アンケート集

氏名	区分	発表テーマ	発表箇所	発表年月
浅葉尚一	論文	港湾に対する私見	「港湾」vol.46.	1969. 4
荒木智種	論文	港湾の情報	「港湾」vol.46.	1969.12
	書評	G. Haussmann; Transcontainer Umschlag	「港湾経済研」No.7	1969.10
和泉雄三	共著	広域経済圏における函館市と隣接町村	函館大学産業開発研究所報告	1969. 9
	〃	函館市と亀田町における都市化と交通	同上	〃
	〃	広域経済圏のもつ経済的社会的諸効果—函館市と亀田町の合併問題をめぐって	同上	〃
北見俊郎	論文	港湾における「広域化」問題	日本経済政策学会年報	1969. 5
	〃	港湾都市の国際比較	「都市問題講座」No.2	1969. 6
	〃	流通過程における港湾の立場	「港湾」vol.46 No.5	1969. 5
	〃	大都市港湾の問題点と将来	「港湾経済研究」No.7	1969.10
	〃	広域港湾とポート・オーソリティ問題	「海運経済研究」No.3	1969.10

氏　　名	区分	発表テーマ	発表箇所	発表年月
	論文	人間・経済と港湾 —その基礎的諸問題—	「港湾」vol.46 No.11	1969. 11
	資料	港湾の体系と体制	「港湾」vol.46 No.12	1969. 12
	書評	港湾産業研究会編「変革期の港湾産業」	「港湾」vol.46 No. 3	1969. 3
	〃	高村忠也編「国際海上コンテナ輸送をめぐる12章」	「港湾」vol.46 No. 4	1969. 4
	〃	栗林労組編「栗林労働史」	「港湾」vol.46 No. 7	1969. 7
	〃	松橋幸一「港湾荷役実務」	「港湾」vol.47 No. 2	1970. 2
喜多村　昌次郎	論文	流通経費と港湾体制	「港湾」vol.46	1969. 5
	〃	コンテナ・ターミナルの運営をめぐって	「海運」No.498	1969. 3
	〃	協同一貫輸送と港湾産業	『港湾」vol.46	1969. 10
	〃	合理化一般とターミナル・オペレーション	「海運」No.507	1969. 8
	〃	流通革新と港湾機能(上・中・下)	日刊運輸タイムズ	1969. 8
	〃	港湾産業の組織と構造（上・中下）	〃	〃 9
	〃	港湾の合理化と経営労働（上・中・下）	〃	〃 9
	〃	臨港倉庫の機能と立地（上・中下）	〃	〃 10
	〃	流通経費と港湾運送（上・中・下）	〃	1970. 1
	書評	栗林商会労働組合編「栗林労働史」	「港湾経済研究」	1969. 10
今　野　修　平	論文	観光港の現状と開発への課題	「港湾」vol.46 No. 8	1969. 8
	〃	都市港湾論序説Ⅰ—Ⅳ	「海事産業研究所報」No. 38—41	1966. 8 ～ 11
	〃	大都市港湾としての東京港の問題点	「港湾経済研究」No. 7	1969. 10
	〃	流行歌にみる港湾	「港湾」vol. 46 No.11	1969. 11
	〃	日本の臨海工業地帯の発帯と鹿島港の開発	オーシャンエイジvol.2 No. 2	1970. 2

氏名	区分	発表テーマ	発表箇所	発表年月
今野修平	論文	開発迫られる超大規模臨海工港昭和60年代への展望	ペトロケミカルエンジニアリング vol. 2 No. 2	1970. 2
神代方雅	論文	海運流通の斉合性—そのⅠ	「港湾経済研究」No. 7	1969. 10
柾幸雄	共著	横浜市およびその周辺	講談社「日本の文化地理」(神奈川県編)	1970. 1
	資料	横浜市の都市交通問題	横浜市企画調整室	1970. 1
	書評	神戸市編「広域港湾の開発と発展」	「港湾経済研究」No. 7	1969. 10
松浦茂治	論文	大分新産都建設進捗 —地域開発と公害防止—	大分大学経済学部経済研究所No. 4	1970. 2
松橋幸一	書評	港湾産業研究会編「変革期の港湾産業」	「港湾経済研究」No. 7	1969. 10
宮野武雄	資料	都市と輸送(輸送歳時記)	「物的流通」No. 1～4	1969. 8～1
宮下国生	論文	海運市場の構成に関する一考察 —海上運賃論の基礎として—	「神戸大学経営学部年報」XV	1969. 6
	〃	ザンマンの海上運賃論	「海運経済研究」No. 3	1969. 10
	〃	世界海運市場解体の理論 —ザンマン教授の所説を中心にして—	「国民経済雑誌」vol. 120 No. 6	1969. 12
宮地光之	論文	港湾運送機能合理化の考察	「港湾経済研究」No. 7	1969. 10
松沢太郎	著書	苫小牧港　過去・現在・将来	北海評論社	1970. 2
	論文	臨海工業基地計画への提案	苫小牧民報	1970. 1
岡庭博	論文	新海運政策と海運経営のあり方	「海運」	1969. 5
	〃	海運経営の今後の変化	「海運」	1970. 1
大島藤太郎	著書	現代の交通問題	労働旬報社	1970. 2
斎藤公助	論文	最近の保管需要の働きと倉庫立地	「港湾」vol. 46 No.9	1969. 9
	〃	海上コンテナ輸送1か年の回顧と展望	「港湾」vol. 46 No.10	1969. 10
佐々木高志	論文	港湾の近代化と「制度」の問題	「港湾経済研究」No. 7	1969. 10
柴田悦子	論文	港湾における労働生産性	「海事産業研究所報」No.33	1969. 3

氏　名	区分	発表テーマ	発表箇所	発表年月
柴田悦子	論文	物的流通「近代化」の問題点	「大阪港」No.95	1969. 5
	〃	物的流通「近代化」の意義と本質	「経済」	1969. 6
	〃	大阪港の貨物流動とその問題点	「港湾経済研究」No. 7	1969. 10
	〃	市民生活と港湾	「港湾」vol. 46 No.11	1969. 11
	〃	物的流通からみた大阪港	「大阪人」	1969. 11
	〃	食料輸入と大都市港湾	「経営研究」20周年記念号(上)	1970. 1
	資料	物的流通の内航海運	「海運経済研究」No. 3	1969. 10
東海林　滋	資料	現代世界海運の構造	「関西大学商学論集」vol. 14 No. 4	1969. 10
高見玄一郎	論文	港湾運営と情報処理	「港湾」vol. 46 No.4	1969. 4
	〃	港湾の近代化	運輸調査局「運輸と経済」	1969. 10
	〃	広域港湾論—主としてオペレーションの観点から—	「港湾経済研究」No. 7	1969. 10
田中文信	論文	運賃率理論の進化的発展とその設定の理想的原理について	市邸学園短期大学「社会科学論集」No. 6	1969. 3
	〃	交通学の対象に関する学説の批判と運輸サービスの概念について	〃 No. 7	1970. 1
寺谷武明	論文	日米船鉄交換と民営造船業（ＩＸ)～(ＸＸⅢ)	「海事産業研究所報」No.32～45	1969. 2 ～ 1970. 3
	書評	大阪市港湾局編「大阪港史」	「港湾産業研究」No. 7	1969. 10
徳田欣次	論文	北海道における不安定雇用の実態—臨時・日雇・パートタイマーを中心に—	「北海道労働研究」No.107	1969. 3
	〃	北海道開発の実態	新評論刊「地域と産業」	1969. 3
	〃	北海道工業（建設業を含む）の季節性要因	道立総研判「北海道経済の季節性－総括—」	1969. 12
玉井克輔	論文	港湾労働災害に関する責任の所在についての考察—特に船内荷役労働について—	「港湾経済研究」No. 7	1969. 12
筒浦　明	論文	北海道における炭田地域の現状	「地理」vol. 14 No. 2	1969. 2

氏　　名	区分	発表テーマ	発表箇所	発表年月
筒浦　明	紹介	道都札幌	講談社刊「日本の文化地理，北海道編」	1969. 8
千須和　富士夫	書評	Maritime Cargo Tramsportation Conference N. A. S.: San Francisco Port Study	「港湾経済研究」No. 7	1969. 10
矢野　剛	論文	欧米のポートオーソリティとわが国の港湾管理	「城西経済学会誌」 vol. 5 No. 2	1969. 9
米山　譲	論文	固定資産の再評価と減価償却	「海外 海事研究」No.66	1969. 7
	〃	日本海運の資本構成及び利潤の問題	「海運」	1969. 10

「港湾経済研究」総目次

1. 1963年（No. 1）（部数なし）

序……矢野　剛

研　究

本邦戦時港湾施策……矢野　剛
港湾財政の問題点……柴田銀次郎
港湾設備の増強と地域開発……伊坂市助
港湾における新しい労働管理の概念……高見玄一郎
港湾運送業の現状……松本　清
衣浦港の交通……松浦茂治
港湾経済の本質……北見俊郎
港湾施設の与えた損害に対する船主の賠償責任と海上保険…今泉敬忠

文献紹介

「イギリス主要港湾に関する調査委員会報告書」……中西　睦
「神戸港における港湾荷役経済の研究」……寺谷武明

学会記録

2. 1964（No. 2）（部数若干あり，送料実費とも¥500）（学会事務局）

序……矢野　剛

研　究

共通論題（港湾投資の諸問題）

長期経済計画における港湾投資額の推計……加納治郎（1）
摩耶ふ頭の建設と運営……岸　孝雄（16）
公共投資と港湾経済……北見俊郎（28）

自由論題

イギリスにおける港湾諸料金の徴集制度と問題点……中西　睦（42）
ヨーロッパの石油港湾……浮穴和俊（51）
港湾労働対策への一提案……柴田銀次郎（78）
港湾労働の課題……河越重任（82）
船積み月末集中の原因とその対策……高村忠也（97）

国際コンテナーの諸問題……宮　野　武　雄　(114)

文献紹介

北見俊郎著「アジア経済の発展と港湾」……中　西　　睦　(141)
北海道立総合経済研究所編「北海道の港湾荷役労働」……寺　谷　武　明　(145)
同　上「港湾労働」……北海道立総合経済研究所　(150)

学会記録

日本港湾経済学会会則・役員……(167)
学　会　記　事……(171)
会員業績リスト……(175)
会　員　名　簿……(188)

3.　1965年（No. 3）　（部数若干あり，送料実費とも ¥500）

序……矢　野　　剛

研　　究

共通論題（経済発展と港湾経営）

港湾のもたらす経済的利益の分析……柴　田　銀次郎　(1)
港湾経営の「理念」と問題性……北　見　俊　郎　(12)

自　由　論　題

港湾機能の地域的問題点……今　野　修　平　(25)
国際収支における港湾経費改善のための理論的考察……中　西　　睦　(67)
港湾資産評価とその問題点……杉　沢　新　一　(69)

文献紹介

矢野剛著
「港湾経済の研究」……寺　谷　武　明　(84)
海運系新論集刊行会編
「海運と港湾の新しい発展のために」……織　田　政　夫　(90)
向井梅次著
「港湾の管理開発」……喜多村　昌次郎　(96)
喜多村昌次郎著
「港湾労働の構造と変動」……徳　田　欣　次　(103)
宮崎茂一著
「港湾計画」……川　崎　芳　一　(113)

P. C. Omtvedt;
Report on The Profitability of Port Investments……中 西 睦 (117)
J. Bird;
The Major Seaports of The United Kingdom……北 見 俊 郎 (131)

学会記録

日本港湾経済学会会則・役員……(131)
学 会 記 事……(138)
会員業績リスト……(145)
会 員 名 簿……(151)
編 集 後 記……(164)

6. 1968年 (No. 4) (部数若干あり，送料実費とも ¥800)

序……矢 野 剛

研 究

共通論題（地域開発と港湾）

後進的地域開発と港湾機能……武 山 弘 (1)
港湾による地域開発問題について……田 中 文 信 (16)
港湾機能と経済発展……北 見 俊 郎 (31)
——地域開発に関連して——

東北開発と野蒜築港……寺 谷 武 明 (59)
——明治前期港湾の一事例——
神奈川県の第3次総合開発計画と新しい港湾の計画理論……高 見 玄一郎 (72)
港湾における都市再開発の問題……今 野 修 平 (87)
——東京港における都市再開発を例として——

自 由 論 題

港湾労働の基調……喜多村 昌次郎 (101)
——横浜港における労働力移動の素描——
港湾労働の近代化条件について……徳 田 欣 次 (121)
港湾の最適投資基準……是 常 福 治 (147)
——神戸港における測定の一例——
名古屋港発展史……松 浦 茂 治 (158)
——昭和13—32年の20か年について——
港湾の物的流通費について……中 西 睦 (170)

パレット，フオークリフトの諸問題……宮野武雄（186）

資　料

イギリス戦時港湾施策……矢野　剛（195）
東京湾における広域港湾計画に対する一指針……奥村武正 今野修平（206）
横浜港施設改善に関する日本損害保険協会
からの要望について……今泉敬忠（216）

文献紹介

Colonel R. B. Oram;
Cargo Handling and the Modern Port……松木俊武（220）
Charles P. Larrowe;
Shape-up and Hiring Hall……山本泰督（225）
高見玄一郎著
「港湾労務管理の実務」……徳田欣次（233）
松宮　斌著
「港湾の財政・経営のあり方」……柴田悦子（233）
横浜市港湾局編
「横浜港における港湾労働者の実態と住宅事情」……和泉雄三（238）
新潟臨港海陸運送株式会社編著
「創業六十年史」……小林寿夫（250）

学会記録

「港湾経済研究」総目次……（279）
編集後記……（279）

5.　1967年（No. 5）　（部数若干あり，送料実費とも ¥500）

序……矢野　剛

研　究

共通論題（輸送の近代化と港湾）
輸送の近代化と臨港上屋の運営……松本　清（1）
港湾業務の合理化と海運……岡庭　博（9）
流通近代化とコンテナリゼーション……高見玄一郎（19）
物的流通の近代化と港湾……斎藤公助（30）
「輸送の近代化」と全港湾輸送体制……北見俊郎（48）

共通論題（日本海沿岸における港湾の諸問題）

経済開発と日本海沿岸の港湾……佐藤元重（60）
新潟臨海埠頭の形成とその特性……小林寿夫（68）
小樽港の現状と課題……神代方雅（76）

自由論題

港湾施設利用の問題点……今野修平・井上洋二郎（89）
港湾原単位算定における問題点……杉沢新一（105）
港湾労働法の施行をめぐる諸問題……大森秀雄（118）
後進島地域経済発展の転型と港湾商機能……武山弘（128）
砂利類の海上輸送増大化傾向について……棚橋貞明（143）
わが国における運河発達の特性……柾幸雄（157）

文献紹介

住田正二著「港湾運送と港湾管理の基礎理論」……佐々木高志（170）
中西　睦著「港湾流通経済の分析」……河西稔（176）
港湾産業研究会編「港湾産業の発展のために」……和泉雄三（189）
Docks and Harbours Act 1966……河越重任（192）
V. H. Jensen; Hiring of Dock Workers……織田政夫（198）

学会記録

学会記事……（202）
会員業績アンケート……（209）
「港湾経済研究」総目次……（217）
編集後記

6. 1968年（No. 6）　（部数若干あり，送料実費とも ¥800）

序……矢野剛

研究

港湾の近代化と運送の機械化……和泉雄三（1）
都市化と港湾の近代化……今野修平（14）
苫小牧港における専用船の実態……松沢太郎（30）

◆

港湾の経済的性格に関して……柴田悦子（38）

ターミナル・オペレーションの経営的基礎……喜多村　昌次郎（49）
——米国主要港との比較において——
地方公営企業としての港湾整備事業……細　野　日出男（62）
港湾とシティ・プランの基本論……神　代　方　雅（74）
貨物輸送史上における港湾……宮　野　武　雄（86）
未来学成立の可能性……本　間　幸　作（100）
——港湾論に関連づけて——

文献紹介

日本港運協会編「日本港湾運送業史」……寺　谷　武　明（121）
松本好雄著『コンテナの輸送実務』……松　岡　英　郎（126）
喜多村昌次郎著「輸送革新と港湾」……玉　井　克　輔（131）
北見俊郎著「港湾論」……柾　　幸　雄（145）
B. Chinitz ; Freight and the Metropolis……武　山　　弘（149）
T. A. Smith ; A Functional Analysis of the Ocean Port…山　本　泰　督（156）

学会記録

学　会　記　事……（163）
「港湾経済研究」総目次……（175）
編　集　後　記

7.　1969年（No. 7）　（部数若干あり，送料実費とも ¥800）

序……矢　野　　剛

研　　究

大都市港湾の諸問題と将来
大阪港の貨物流通とその問題点……柴　田　悦　子（1）
大都市港湾としての東京港の問題点……今　野　修　平（20）
広域港湾論—主としてオペレーションの観点から……高　見　玄一郎（36）
大都市港湾の問題点と将来……北　見　俊　郎（52）

港湾運送機能合理化の考察……宮　地　光　之（72）
海運流通の斉合性……神　代　方　雅（82）
港湾の近代化と「制度」の問題……佐々木　高　志（96）
港湾労働災害に関する責任の所在についての考察……玉　井　克　輔（104）
——特に船内荷役労働について——

文献紹介

大阪市港湾局編「大阪港史」……寺谷武明（120）
栗林商会労働組合編「栗林労働史」……喜多村昌次郎（125）
神戸市企画局調査部編「広域港湾の開発と発展」……柾幸雄（133）
港湾産業研究会編「変革期の港湾産業」……松橋幸一（136）
Dipl, Ing. Gustav Haussmann;
Transcontainer-Umschlag……荒木智種（144）
Maritime Cargo Transportation Conference N. A. S;
San Francisco Port Study……千須和富士夫（148）

学会記録

学会記事……（157）
会員業績リスト……（170）
年報総目次……（180）
編集後記……（187）

編集後記

日本という国はブームがおこり易い。せまいところに大勢がすんでいて，インディビュデュアリズム（個人主義）が成長していないためか，ジャーナリズムの底が浅いためか，ともかくブームがおこり易い。しかし，考えるべきものは，ブームそのものではなく，その底を流れる本質的な問題についてである。「流通革新」とか「港湾問題」はブームとはいえないが，ブームのようなとりあつかいをされてはならない。学問研究もブームの影響をうけるが，ブームの上にのっかると，まずそれは学問ではなくなってしまうおそれがある。

この号から，出版を成山堂にお願いすることにした。（種々の理由から，編集委員会や理事会の協議の結果でもあった。）したがって，カバーデザイン，その他で若干の装いを新たにした点もあるが，できるかぎり従来の学会誌としての伝統にしたがった。また編集方針も前年度の自由論題，今年度共通論題の報告原稿に論文のみの掲載を加えた。また，各論文の巻頭に英文サマリーをのせる予定であったが結果的に見送ることにした。ともあれそのようなわけで，この号から年報も出版社におまかせしたが，所詮，研究とは「じみ」な存在であるので，年報もブームとは無関係だろうし，また，それでよい。本年5月から学会事務局が「運輸・港湾産業研究室」内にうつり，新しい態勢をもって出発したが，大会準備やこの年報刊行についても室長の喜多村先生にいろいろとお世話になり，また事務局の土居靖範氏のご努力や，鈴木　暁氏，井尻文也氏のご協力にお礼を申しげねばならない。さらに出版については成山堂社長の小川実氏や長年印刷を担当してくださってきた文化印刷社長桜井清次氏に感謝の意を表する次第である。

Aug. 1970（文責・北見）

編集委員（A・B・C順）

荒木智種　今野修平　北見俊郎
柾　幸雄　柴田悦子　徳田欣次
山本泰督

◆日本港湾経済学会のあゆみ

1962年	創立総会および第1回大会開催（横浜港）	
1963年	第2回大会（東　京　港）	共通論題（港湾投資の諸問題）
1964年	第3回大会（神　戸　港）	共通論題（経済発展と港湾経営）
1965年	第4回大会（名　古　屋　港）	共通論題（地域開発と港湾）
1966年	第5回大会（新　潟　港）	共通論題（日本海沿岸における港湾の諸問題と将来）
1967年	第6回大会（北九州・下関港）	共通論題（輸送の近代化と港湾）
1968年	第7回大会（小樽・道央諸港）	共通論題（流通体系の斉合性と港湾の近代化）
1969年	第8回大会（大　阪　港）	共通論題（大都市港湾の諸題と将来）
1970年	第9回大会（清　水　港）	共通論題（流通革新と埠頭経営）

流通革新と埠頭経営

（『港湾経済研究』No.8）　定価1250円

1970年9月20日印　刷
1970年10月5日発　行

©1970

編　者　日本港湾経済学会
横浜市中区山下町279の1地先
（横浜市山下埠頭港湾厚生センター）
運輸港湾産業研究室気付
日本港湾経済学会事務局
TEL 045－651－4166　〒231

発行者　（株）成山堂書店
代表者　小川　実

印刷者　文化印刷株式会社

発行所　株式会社　成山堂書店
東京本社　東京都渋谷区富ケ谷1-13-6（〒151）
電話 03—467—7474（代）～8
振替口座　東京78174番
神戸出張所　神戸市生田区三宮センター街一丁目
流泉書房内　電話078—33—7390番

（分）3056（製）24021（出）3819

港湾・海運関係図書案内

運輸省海運局監修	海事法令シリーズ① 海運六法（45年版）	A5	／800頁 1,500円
運輸省港湾局監修	海事法令シリーズ⑤ 港湾六法（45年版）	A5	／1,500頁 2,500円
岡庭博著	新訂海運の概要	A5	／234頁 950円
飯田秀雄著	ボナー法と国際海運カルテル	A5	／200頁 500円
内山順一著	荷主のための海運運賃同盟	A5	／126頁 650円
黒田英雄著	世界海運史	A5	／364頁 1,200円
松本好雄著	コンテナの輸送実務	A5	／256頁 950円
高村忠也編	国際海上コンテナ輸送をめぐる12章	A5	／289頁 1,500円
飯田秀雄著	コンテナ輸送の理論と実際	A5	／270頁 1,000円
タンカー実務研究会編	外航タンカーの営業実務	A5	／274頁 1,200円
稲村覚著	外航タンカーの運航実務	A5	／434頁 2,500円
田中克典他共著	内航タンカー実務	A5	／170頁 650円
西本尹著	内航タンカー安全必携	A5	／350頁 1,500円
大木一男著	海運実務シリーズ① 船荷証券の実務的解説	A5	／208頁 850円
大木一男著	海運実務シリーズ② 海上運送貨物損害賠償の実務的解説	A5	／220頁 950円
大木一男著	海運実務シリーズ③ 用船契約の実務的解説	A5	／250頁 1,500円
住田正二著	港湾運送と港湾管理の基礎理論	A5	／296頁 950円
運航技術研究会編	最新荷役実務	A5	／302頁 1,200円

総合解説付図書目録進呈　　（株）成山堂書店